

13日 月曜

エスティル

2:1 この出来事の後、アハシュエロス王の憤りがおさまると、王は、ワシュティのこと、彼女のしたこと、また、彼女に対して決められたことを思い出した。

2:2 そのとき、王に仕える若い者たちは言った。「王のために容姿の美しい未婚の娘たちを捜しましょう。

2:3 王は、王国のすべての州に役人を任命し、容姿の美しい未婚の娘たちをみな、シュシャンの城の婦人部屋に集めさせ、女たちの監督官である王の宦官ヘガイの管理のもとに置き、化粧に必要な品々を彼女たちに与えるようにしてください。

2:4 そして、王のお心にかなうおとめをワシュティの代わりに王妃としてください。」このことは王の心にかなったので、彼はそのようにした。

2:5 シュシャンの城にひとりのユダヤ人がいた。その名をモルデカイといって、ベニヤミン人キシュの子シムイの子ヤイルの子であった。

2:6 このキシュは、バビロンの王ネブカデネザルが捕え移したユダの王エコヌヤといっしょに捕え移された捕囚の民とともに、エルサレムから捕え移された者であった。

2:7 モルデカイはおじの娘ハダサ、すなわち、エスティルを養育していた。彼女には父も母もないなかったからである。このおとめは、姿も顔立ちも美しかった。彼女の父と母が死んだとき、モルデカイは彼女を引き取って自分の娘としたのである。

2:8 王の命令、すなわちその法令が伝えられて、多くのおとめたちがシュシャンの城に集



聖書の記述

て、神様はそのような人を守り可能性を与えて、お用いになるのです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

められ、ヘガイの管理のもとに置かれたとき、エスティルも王宮に連れて行かれて、女たちの監督官ヘガイの管理のもとに置かれた。

2:9 このおとめは、ヘガイの心にかない、彼の好意を得た。そこで、彼は急いで化粧に必要な品々とごちそうを彼女に与え、また王宮から選ばれた七人の侍女を彼女にあてがつた。そして、ヘガイは彼女とその侍女たちを、婦人部屋の最も良い所に移した。

2:10 エスティルは自分の民族をも、自分の生まれをも明かさなかった。モルデカイが、明かしてはならないと彼女に命じておいたからである。

2:11 モルデカイは毎日婦人部屋の庭の前を歩き回り、エスティルの安否と、彼女がどうされるかを知ろうとしていた。

王の臣下たちはワシュティが復権した場合の報復を恐れてか、早く次の王妃を決めるようにと画策します。王妃選びに時間がかかるないように一般人から王妃を選ぶという、異例の方針を進言しますが、それでエスティルにも機会がめぐってきました。その背後には当然主の御手が動いたのです。

その機会に主から用いられたのがモルデカイでありエスティルです。モルデカイは「シュシャンの城に」とあるように、王に仕える官吏でした。捕囚の民という弱い立場にありながらも、努力と誠実で社会からも評価されていたのではないかと推察されます。また両親が亡くなった従姉妹エスティルの親代わりとなりましたことからも、もともと親族を助ける愛の持ち主であったことがわかります。

エスティルも、「ヘガイの心にかない、彼の好意を得た」とありますから、容姿だけではなく、その人柄も誰からも愛されるものだったのでしょうか。このように、捕囚という過酷な身の上にありながらも、誠実にそして信仰で生きていくことによつ